

8K 超高精細度テレビジョンの臨場感

谷 岡 健 吉

(メディカル・イメージング・コンソーシアム)

2000年にNHK放送技術研究所で次世代の超高臨場感テレビとして研究開発が始まった8K超高精細度テレビジョン（スーパーハイビジョン）も、今や官民挙げての実用放送の準備が進められている。4Kと比べても4倍の約3300万の画素を有する8Kであるが、そのスペックは4Kとの画素数競争ではなく、画像はどのような条件のときにあたかも自分がその場にいるような高い臨場感が得られるか、というヒューマンサイエンスの研究をベースにして決められた。8Kが異次元のテレビといわれるゆえんはそこにあるが、それを確信したある体験を述べたい。

筆者は8Kの医療応用の研究に取り組んでおり、2年近く前に高知市で、その講演と共にS社の協力を得て85インチ8Kディスプレイによる映像展示を行った。「四国初上陸の8K液晶テレビ」との前宣伝の効果もあってか、会場には多くの方が来られた。その中の団体見学の高校生が、パリのシャンゼリゼ通りが映し出された8Kディスプレイを見るなり発した言葉は「うっそー！」であった。「行ったことないけどパリにいるみたい！」と興奮しながら、次にディスプレイに向けてスマホのシャッターを切った。そのスマホの画像を慣れた手つきで拡大しながら、再び「うっそー！」であった。テレビの画面を撮ったにもかかわらず、拡大しても画像がまるで現地で直接撮影したように鮮明なことに驚いたのであった。

高校生たちは地元の家電量販店で4Kテレビは見たとのことであるが、そこではこのような本物感はなかったと語った。筆者のような余計な知識による先入観をもった映像関係技術者よりも、澄み切った素直な目の彼らのほうが、8Kの本質、すなわちその超高臨場感という従来のテレビにはない異次元性を強く感じとっているのではと思ったひとときであった。

8Kも本誌の解説にあるように、ハイダイナミックレンジ化や広色域化などでその臨場感はさらに高まりつつある。また、この超高解像度性を活かした8K内視鏡手術システムも、放送より先に実用化されようとしている。そのような状況の中でごく最近気づいたことがある。研究の場で8K映像を見慣れると、帰宅して見る2Kテレビは視線が追いかける先の細部が十分に見えず、違和感を覚えることがあるのだ。実は異次元といわれている8Kこそ、目に優しい自然なテレビ、つまりわれわれが目指してきた本当のテレビなのではと感じるのである。